

# リディア・マリア・チャイルドにおける 娘の教育と〈母〉

——アンテベラム期アメリカの家庭教育書・育児書をめぐり考察——

東京大学教育哲学・教育史研究室 日 野 淑 子

**'Mother' and Management of 'Daughter' in the discourse of Lydia Maria Child :  
A case study of childrearing books in ante-bellum America**

Toshiko HINO

*The Empire of the Mother* provides one of the ideological meanings of womanhood in popular domestic literatures or child-rearing books during the ante-bellum America, gaining increasing interest in studies. The image showed paradoxical femininity, called "Woman's Sphere" in the era. This study focuses on the discourse of *The Mother's Book*, one of the popular child-rearing books, and on the discourse in letters written by Lydia Maria Child, the author of this book. It argues that the theme of this book comprises "mother's" important duties and attitudes on management, nurture and education of her child, especially the "daughter", and that the "mother" is advised to "govern" her "self". It also concludes that bringing up "daughters" is the problem in this period, and that the "mother" is the key concept of female life-courses. The discourse in Child's letters helps to clear this conclusion. Her self-consciousness of "individual freedom" is the way of solving ambivalence about her role as a woman and an activist, which says it would be possible that ordinary women in the period had such self-consciousness.

目 次

おわりに

はじめに

はじめに

## I. 「母の本」の歴史的位置と特性

- A. アンテベラム期の家庭教育書・育児書の歴史的位  
置
- B. 「母の本」をめぐり著者－読者関係
- C. 「母の本」の構成と内容－娘の教育の関心－

## II. “女性性”をめぐりチャイルド

- A. 分析の留意点
- B. チャイルド像の多様性
- C. チャイルドの言説における“女性性”

## III. 女性の人間形成の問題化と「母の本」

- A. チャイルドの言説における“女性性”と“個”の  
意識－調和と相剋－
- B. 娘の教育＝女性の人間形成の問題化－「母の本」  
の言説をめぐって－

アンテベラム期（南北戦争前）のアメリカ，ニューイングランドにおいて，家庭教育書・育児書が数も種類も多く出版されたことは，既に多くの先行研究によって確認されている事実である。なかでも代表的な研究が，ライアンによる「母の帝国」<sup>1)</sup>である。このタイトルにも現われているように，これら書物は理想的な〈母〉<sup>2)</sup>を礼賛する言説に溢れている。子育てにおける〈母〉の理想化は，“純潔・敬虔・従順・家庭性”といった“女性性”の理想化の一側面であるとされてきた<sup>3)</sup>。このイメージは“近代家族”の成立に関わる重要な特徴であるとされており，教育史研究においては，その内実を母子関係，親子関係という視点から明らかにする必要がある<sup>4)</sup>。

本稿は，家庭教育書・育児書の氾濫現象を扱った研究

においてほぼ必ず言及される「母の本」(*The Mother's Book*, Boston, 1831)の子育てに関する議論を中心に、その著者リディア・マリア・チャイルド(以下チャイルドとする)の言説を読解することによって、この時代の世代関係の一端を照射することを主眼とする。

チャイルドは、当時はもちろんいまだに伝記を書き続けられているほどの個性と才能をもった人物である<sup>5)</sup>。アメリカ女性史の通史においても、奴隷制反対運動の著作家として、また女性史の叙述家として登場する<sup>6)</sup>。しかし、本稿ではその優秀性や卓越性には注目しない。「母の本」の内容は彼女の個性が生んだものというより、むしろ一般的な言説である(Ⅰ章参照)。また、当時の〈母〉の理想化を伴った“女性性”に対して、チャイルドはアンビヴァレントであったと指摘されてきた。そのアンビヴァレント性に注目することは、時代が要求した“女性性”を浮かびあがらせることを可能にするだろう。即ち、「母の本」における規範的言説を、“女性性”をめぐるゆれを含んだ書簡の言説を介して分析することは、当時の母子関係の深層を明らかにするために、有効な方法なのである。

本稿で明らかにされる事柄を予め整理しておく。まず「母の本」を含むアンテベラム期の家庭教育書・育児書の氾濫と〈母〉の理想化現象の背景を、先行研究により概観する。それらによれば、〈母〉の理想像は、政治的・経済的背景により主として“息子”との関係から説明されてきた。しかし、「母の本」の言説を分析すると〈母〉は“娘”の教育において重要であるということが確認できるのである。チャイルドの書簡言説の分析は、そのことの意味を明らかにする。“女性性”は、“女性の領域”と言い得るような明確な領域性をもってはいない。その不安定さは“自由な個人”という理念によって解消される。〈母〉は、“女性性”にとらわれながらも“個人”への志向を持った女性の“自己”確認の概念として機能したのである。“娘”の教育において〈母〉に重要な役割を課した「母の本」の言説を、女性の人間形成過程の問題としてとらえるというこの視点は、チャイルドの書簡言説の分析によって導き出されたものである。

## I. 「母の本」の歴史的位置と特性

### A. アンテベラム期の家庭教育書・育児書の歴史的位置

アンテベラム期における家庭教育書・育児書の氾濫と〈母〉の礼讃現象は、従来の研究では概して以下のような背景により説明されてきている。

#### 1. 宗教的背景

植民地時代に支配的であったピューリタニズム、特にカルヴィニズムの弱体化により子ども観が変化した。即ち、ピューリタンが原罪説による厳格な子ども観により「意志を挫く」ような子育てを説いたのに対し、無垢なる子ども観の発見によって甘く優しい子育ての方法が意識化された。〈母〉の礼讃はこの方法意識によるものである<sup>7)</sup>。

#### 2. 経済的背景

十八世紀末から十九世紀初頭に始まる産業革命は、労働諸条件の変化、職住分離化などにより、男女の性別役割分担、領域分離を促進した。これにより、家庭に留まった母親は、子育てにおける重要な役割を与えられ、非手工業者(non-manual worker, いわゆるホワイトカラー)を一家の稼ぎ手とする新興中産階級の成立期にあって、その男子を育成する役目を担うようになった<sup>8)</sup>。

#### 3. 政治的背景

建国期からほぼ一世代を経たこの時期、“自由な個人”という共和国の理想的人間像を“育てる”ことが主題化されたことである。“共和国の母”という理念は、その課題に応え、ジャクソニアン・デモクラシーのもとでの民主主義体制強化のなかで、その行き過ぎを中和する緩和剤としての機能を果たした<sup>9)</sup>。

#### 4. 医学的視線

骨相学者らの影響により、子どもの衣食や環境への関心が高まった<sup>10)</sup>。

#### 5. 啓蒙家・教育家的視線

性格形成、およびその基礎となる習慣形成が重要であるという考えにより、幼児への早期知的教育(学校での)への反対論が盛んになり、育児書が多数書かれた<sup>11)</sup>。

#### 6. 出版産業の勃興<sup>12)</sup>

以上、六つの背景は単純化されたものであり、どの要因が最も大きな動因となったかということは重要ではない。むしろ問うべきはその相互関連性である。大まかにいえば、1・4・5などの変化は、2・3などの時代の流れのメインストリームに抗した動きであり、6はそれを別な意味で促進したと言えよう。

本稿における分析は、このような背景のもとに出版された書物のひとつ、「母の本」の言説における母子関係の一端を描出する試みである。従って、これらの背景を全て検討することはできない。しかし、特に“息子”との関係においてなされてきた2、3のような〈母〉の性格づけに対して、本稿では“娘”との関係における〈母〉という、女性に焦点化された分析を行う。それは、以下B、C節においてみるように、「母の本」のテーマ

が「娘」の教育であるという事実によるものである。

### B. 「母の本」をめぐる著者－読者関係

書物としての「母の本」は、どのような性格づけが可能だろうか。まず、対象としている読者は“中流 *middle class*”の母親であると著者自身が述べている。

そして、著者は読者への配慮を怠らない。序において見られるものを列挙してみよう。第一に、チャイルドは女性読者向けの書物を多く出版しているが、そのひとつ「儉約家の主婦」(*The Frugal Housewives*, Boston, 1829)が好評だったことに触れ、女性たちのこうしたマニュアル本への要望に応じたことを記している。第二に、一般的に受け入れられた考えに基づいた助言であることを強調している。例えば、“私の意見では”などという表現はあるが、ここに書かれていることは多くの母親たちとの会話の賜物であり、格言や言い伝えなど実際の素朴な考えも取り入れたことを記している。つまり、普通一般の母親への助言であることをアピールしているのである。このような読者への配慮の効果は明確に現われた。1845年には第8版を数え、英国版(12版)やドイツ語版も発行されている<sup>13)</sup>。

しかし、我々の予想に反して、著者自身にとってこの本の重要性はそれほどあるわけではない。手紙には、3,000部の著作料が入ったことへの言及しかない(Lb 1/30/1836)。この事実と上記の読者への序の言葉を、ともに考え合わせると、“母の本”の内容はチャイルドの個性が生んだものとは考えにくい。むしろ、読者層の女性たちの共通の認識を系統的に書いたものであるということができるのである。

### C. 「母の本」の構成と内容－娘の教育への関心－

この書物の構成は次の通りである。

- |     |                                      |
|-----|--------------------------------------|
| 序   |                                      |
| 第一章 | 乳幼児期における身体感覚の教育 (development) 方法について |
| 第二章 | 愛情 (affection) の初期発達 (development)   |
| 第三章 | 知性 (intellect) の初期修養 (cultivate)     |
| 第四章 | 子ども期における管理 (management)              |
| 第五章 | 娯楽 (amusement) と仕事 (employment)      |
| 第六章 | 日曜日・宗教・死について・超自然的現象について              |
| 第七章 | 読書に関する助言・年齢別推薦図書目録                   |
| 第八章 | 礼儀正しさ (politeness)                   |

第九章 美しさ・服装・上品さ (gentility)

第十章 十代における管理 (management)

第十一章 結婚

このように「母の本」では、生まれてから(生まれる前から)結婚するまでの子どもの教育にあたっての〈母〉の仕事と心構えが、子どもの年齢別、テーマ別に説かれている。その叙述は、助言とその根拠の提言にエピソードが加えられ、読みやすいものとなっている。

この「母の本」は、本章Aにおいて整理したように、“共和国の母(市民を育てる〈母〉)”やホワイトカラーの男子を育てる〈母〉を説いた書物の一つとして整理されてきた。しかし、この本の内容を吟味することによって、別の線が見えてくるのである。即ち、娘に対する関心の高さである。それは、以下のようなところで典型的に現われるのである。

八章から十一章は、主として十六歳までの娘に対する〈母〉の配慮の大切さについての助言である。また、五章の“仕事”では、息子については、“何でも習得したほうが良いと親が思うことをさせればよい”として“ここではあまり触れないとしている(M63)のに対して、娘については“縫物、編物、織物、パッチワーク”などが具体的に、させる時の留意点も含めて詳しく述べられている(M61~63)。七章には、“一二才から一六才の娘は特に、母親のチェックなしで読書をしてはいけない”とある(M92)。この年齢区分は十章の次のような記述に基づいている。即ち“十二才から十六才の時期は、特に娘に関していえば、性格形成に非常に重要なときです。想像力はとても活発であり、愛情には溢れているけれども、観察を通じてつく判断力はまだしっかりしてはいるわけではなく、熱狂的な感情は経験によって緩和されてはいるからです。この大切な時期に、母は注意深くなりすぎるといえることはありません。できる限り娘を自分の目の届く範囲におくべきです(M129)。”更にこの十章には、以下に挙げるように娘に関する記述がかなり多い。“妻”に必要な経済的能力をつけさせること(M134)。娘の“教育(education)”には、“家事(domestic duties)”が最も大切であること(M145)。“学校にはいろいろな家族の子どもがいるため悪影響があるが、それには、特に娘に関しては注意すること(M147)。”“娘は十七才を過ぎるまで、母親の付添いなしに外出させてはいけない(M156)”，等々。

これらの言説から、「母の本」においては、“娘”の教育に関する〈母〉への助言に重点がおかれていることは明らかである。付け加えれば、助言に付け加えられたエピソードにも娘が多く登場する。以上により、この書

物のテーマは、娘の教育、女性の人間形成における〈母〉の仕事と心構えであるということができよう。

ここで、「母の本」における母と娘の関係をより明確にするために、先行研究の議論を整理し、検討を加えてみよう。アンテベラム期の“家庭に関する書物”の言説分析研究であるライアの「母の帝国」では、子どもとの関係における〈母〉の問題が多く論じられている。しかし“娘”との関係については、以下にみるように検討すべき点が残されている。ライアは、1830年に書かれた小説の言説をもとに次のように論じている。“女性が結婚の時に跳び越えなければならない性的障壁 (sex barrier) は、非常に恐るべきものであった。小説も、母と結婚した娘との間で交わされた手紙も、別離のかなしみを立証しており、母から配偶者への愛情の転移が不完全であることも度々であった”<sup>14)</sup>。

アンテベラム期の母と娘の密着関係に関してはローゼンバーグの分析が著名であり、ライアも言及している。引用してみよう。“こうした母娘関係の核は、徒弟制度ともいえるべきものだった。娘が母になって伝統的な家庭生活に入るこの時代の家族では、母や他の年配の女性が、主婦としての、また母としての技能”を注意深く訓練していたのである”<sup>15)</sup>。しかしながら母と娘がこのような関係で結ばれているとすると、特に娘の教育の困難さと危険な時期について言及し、特に〈母〉に心構えを説いた「母の本」のような書物がなぜ多くの読者を持ったのか。育児や教育についての書物の氾濫は、そのテーマについて“書く価値の高まり”<sup>16)</sup>であり、むしろこの現象からは世代間の“徒弟制度”に問題が生じたといえることができるのである。

「母の本」で強調される〈母〉に要求される態度や心構えは、次章で考察する“女性性”をめぐる女性の生き方に深い関係がある。〈母〉は次のようなことに留意するよう助言されている。即ち、母は“自らの感情 (feeling) を統治 (govern) すべきである” (M4)。“自らの感情 (feeling) を冷静に保つこと” (M6)。“（本を読むなどという）教育を受けていなくても大丈夫”，“良い判断力、親切心、自分の激情 (passion) を制御する習慣を持っていればよい”，“子どもの世話には多くの犠牲と自己否定が必要” (M10~11)。“優しさ (gentleness) のみならず、心の確かさ、強さ (great firmness) も必要” (M46)。“優しく (gentle) ても、愚か (foolish) ではない” (M129)。

このような〈母〉のあるべき姿に関する言説において強調されるのは、自己統治、自己制御、自己犠牲、自己否定、即ち“自己”への視線である。ローゼンバーグの、

手紙等を史料とした分析においては“今日では思春期 (adolescent) の女の子が、その自立と自己認識 (autonomy and self identity) のためには避けられないと考えられている母娘の対立 (hostility) は、当時見られなかった”とされる<sup>17)</sup>。しかし、緊密な母娘関係を物語る書簡言説は、このような対立の不在として分析すべきではない。チャイルドの手紙にも、このテーマは書かれている。“結婚する娘をもつ母親を皆は祝福しますが、母親にとっては子どもの死を除いて最も辛いことです”<sup>18)</sup>。このような言説から読み取ることができるのは、デグラール<sup>19)</sup>、にならってむしろ有機的紐帯としての機能を失った家族=“家庭 (home)”において残存する狭く強い精神的結びつきであると言うべきであろう。

次章においてみるように、女性の人間形成の過程における葛藤は明らかに存在していた。「母の本」をにおける〈母〉に強く要求される“自己”への視線は、女性の、葛藤や対立を含んだ人間形成という問題の重要性を物語っている。更に、「母の本」における“娘の教育”の関心の強さはこの〈母〉としての“自己”確認という文脈、即ち、女性の人間形成過程において〈母〉が重要な鍵として機能するという文脈の上に位置付けられるのである。

## II. “女性性”をめぐるチャイルド

### A. 分析の留意点

本章は、女性の人間形成と〈母〉の関係をチャイルドの書簡言説を介して読み説くことを目的としている。書簡や日記を用いた、理想的〈母〉言説の受け止め方の分析は、最近注目されている方法である<sup>19)</sup>。しかし、それも“書かれたもの”であり、助言書と異なるとはいえない。書く能力を持つ人がたまたま書き残したのかもしれないからである。言説を分析するには、その言説の生産過程に注目することが重要であるが、そこに歴史的变化を読み取ることは難しい作業であるといえる。本稿における分析は、読者層を考慮に入れた上で、“言説”の生産者である著者に注目した分析の試みである。

そのために、彼女の個人的経験や周囲の人々との関係、またその時々における彼女の思いなどに言及する。それはあくまで当時の時代人としての一女性の生き方、内面生活の一端をその言説から読み取るためであり、「母の本」の著者としてその思想の形成基盤を問うためではない。先に触れたように、この書物の内容は、チャイルドの個性が生んだ思想というよりも一般的に受入れられた事柄であることから、後者のような分析は意味を持たない。むしろ、チャイルドの言説における細かな経験やそ

れに対する考え方・身の処し方から、当時の通念を読み取り、「母の本」における言説に解釈を加えることに重点をおくことにする。

## B. チャイルド像の多様性

チャイルドの死の三年後、1883年に編集された書簡集には、ウェンデル・フィリップス<sup>20)</sup>によるチャイルドへの弔辞が添えられている。そこに書かれていたチャイルドは“いわゆる女性的 (feminine) 魅力や上品さを備えた上に、男まさり (masculine) の理解力と力強さも持ち合わせていた” (La263)。弔辞という特殊な言説であるが、このチャイルド像は、現代の研究においても共通している。例えば、1982年に再編集された書簡集に書かれた解説には、“彼女の…価値観は、彼女の女性としての、また活動家としての役割に対するアンビヴァレンスの、非常に大きな原因となった” (Lb序) とある。

“女性の領域”自体が、女性にとって消極的かつ積極の様相をもつ概念であり、明確な区別をするのは困難である<sup>21)</sup>。しかしここでは、そのことを再確認するためにも、先行研究によるチャイルド像を、“女性の領域”を軸に区分することから始めよう。

### 1. “女性の領域”の内側のチャイルド像

詩を愛する心を持ち、女性らしい慎みを失わなかった<sup>22)</sup>。“女性の領域”の活動として「儉約家の主婦」や「母の本」などによって、中流女性の女性としての義務を説いた<sup>24)</sup>。

### 2. “女性の領域”からはみだすチャイルド像

次世代の「アングル・トムの小屋」(1852)のストウ夫人(1811-96)や「若草物語」(1868-69)のオールcott(1832-88)らの文学的モードに比べ、社会的活動性を有し、論争的モードであった<sup>25)</sup>。詩的なものよりも、実際の志向をもっていた<sup>26)</sup>。“主婦”のあり方をめぐって、同世代の女性雑誌編集者に非難された。それは、チャイルドの説く“主婦”が、“神聖なる消費者”という女性像に対立するという理由からだった<sup>27)</sup>。

書簡や書物などを史料としたこれらの分析は、チャイルド像の多様性を示している。これらの言説群から読み取ることができるのは、当時のあるべき女性像は、女性たち自身の内においても、ずれや広がり、調和や対立がみられる、ということである。次節では、チャイルド自身の書簡における言説から、彼女がどのような局面において“女性性”に対するアンビヴァレンスをもったのかをみていくことにしよう。

## C. チャイルドの言説における“女性性”

### 1. 女性としての活動について

書簡集の言説の分析の前に、著作活動に入るまでのチャイルドの略歴を紹介しよう。1802年、マサチューセッツに比較的裕福なパン製造販売者の娘として生まれたチャイルドは、デイムスクール、ローカルグラマースクールに学んだ後、二年間の教職につく。その後、1824年、最初の小説「ホボモク」を出版。子ども向けの雑誌の創刊の傍ら、女子学校 (girl's school) を開設。1828年、ホイッグ党紙編集者デビッドと結婚、1831年「母の本」出版。1833年、夫に続いて奴隷制反対協会に参加、協会の著作活動をはじめめる。1841年から1843年には、協会の「スタンダード」紙の編集者をつとめた。チャイルド夫妻は子どもを持たなかった。また、お互いの仕事のために別居を余儀なくされたこともあった。

次の書簡は、女性の仕事と社会的活動についての会話を友人に語ったものである。“以前は私の親友の一人だった\_\_\_\_夫人 (匿名は原文のまま) は、チャプマン (女性の活動家、注: 引用者) の悪口をいくつか言ったのです。女性には政治的問題を理解する能力はないのだという賢い意見と合わせてね。…この夫人は、女は公的なこと (public affairs) はともかく、細かな義務をこなさなければならない、というのです。これに対して、ハリエット・マーティノー (1802-1876、英国人の著作家、奴隷制反対論者、注: 同) はこう言いました。大きな義務を首尾よくこなす人は、細かな義務を立派にこなすものですよ、とね”。チャイルドは何の論評もしていないが、この友人宛の手紙の冒頭には次のようにある。“奴隷制反対主義は、ここではとても優勢になってきています。…真実は多数の声によってつくられますが、多数派も初めは少数派だったのだとおもうと、嬉しくなります” (Lb 5/9/1836)。つまり、夫人のような古い考えの人が少なくなってきたお陰で、この社会的活動が認められつつあることを、喜ばしく思っているのである。ここには、女性が社会的・政治的な活動をすることへの積極的評価がみられる。

これより一年ほど前に書かれた、ボストン女性奴隷制反対協会宛の手紙にも、それは明確に現われている。“ナポレオンがフランスの女性に、女性が政治を語るのを聞きたくはない、といったところ、その女性はこう応えたそうです。女性が打ち首にされている国で、その理由を聞きたいと思うのは至極当然です、と。女性が残虐に扱われ、鞭打たれ、売られているようなところで、その理由を問わずにすることができませんか。仲間たち、貴女たちはその権利のみならず、厳粛な義務を負っている

のですよ” (Lb 10/?/?/1835)。ここにも女性も政治的領域に進出するべきであるという強い確信が認められよう。

チャイルドの兄のフランシスは、ハーバード大学を卒業した神学者であるが、チャイルドにとっての知的な交流は、幼い頃からの兄とのものが最も深いものであった。彼に対する手紙には、政治や宗教についてのチャイルドの考えが多く書かれ、他の人へのものとは若干トーンが異なっている。その兄に対して、さとうきび栽培の事業を起すことを決心した夫に伴い重労働を余儀なくされたチャイルドは、このようなこともいう。“家には女手が一つしかないので、私は手紙を書くことも諦めなければならないほどです。あなたが女でないことを神に感謝すべきですよ” (Lb 10/20/1840)。つまり女であるがゆえに課せられる仕事に苛立ちを覚えることもあったのである。“私の考えは、沢山の家事やら、時間のかかることで埋もれてしまいました”<sup>28)</sup>。このような言説には、女性の果たすべき義務が知的な作業を妨げているという実感、女性が知的な領域とは異なる領域で生きることを強いられていたことが、読み取ることができる。

以上は、女性が家事などの義務のみならず、社会的・政治的な領域にその知性を活かすべきであるという感覚であるが、それとは全く裏腹と思われる言説群がある。以下に紹介しよう。“ロアリング氏は、私に世間(world)の人ともっと交わるべきだと言いました。私が、前よりもっと不寛容に、より非社会的になっていると言うのです” (Lb 11/13/1836)。“私は騒々しい世間との接触から自由になろうと思います。世間は、私の疲れた心を想像もつかないほどいらいらさせます” (Lb 11/27/1836)。このような厭世感、彼女の活動歴からはそれこそ“想像もつかない”のであるが、これが、彼女の女性観に帰因するものであることは、例えば次のような言説から確認できる。“私が男だったら、旅行靴を持って来週にでもサバンナに行き、二、三日で雪や氷をオレンジの花に変えるのに。…でも私は女なので、閉じ込められていることに屈していなければなりません。幸運なことに、世界中のことについて読む(強調は原文のまま、以下同)ことができます。それはとても感謝すべきことです” (Lb 2/11/1859)。ここには、女であるために要求されることを受容し、納得しようとしているチャイルドの思いを読み取ることができる。自分の書いたものを“女の書いたもの”と評されたチャイルドは、次のようにもいうのである。“私は、そのように自分の感情(affection)への馬鹿な奴隷です。私の生涯にわたってね。私は自分が全く女であることをよく心得てい

ます。私は男らしい(manly)女性を讃えますが、勇ましい(masculine)女性を嫌いです” (Lb 1/1/1855)。

このような感覚は、協会における活動に際しても同じように現われる。1837年グリムケ姉妹(姉1792-1873、妹1805-1879)は、“不特定多数の聴衆”にむけてレクチャーをするという画期的な試みにより、“女性が、私的な領域を抜けて政治の世界に入るべきか否かと言う論争を引き越した” (Lb61)。彼女たちの活躍を前にして、チャイルドはそのような活動の意義は認めるものの、自らが行うことは拒否するのである。“もし私が男だったらレクチャーをします。でも私は女だから、隅に座って靴下でも編んでいましょう” (Lb 3/?/?/1837)。夫に勧められたにもかかわらず、彼女は書いたり聴いたりするほうを選んだのである。これら言説群に読み取れることは、本項の前半でみられた、女性の活動への評価とは全く逆の方向を向いているといえよう。

2. “女性の問題 Woman's Question” へのチャイルドの応答—その根底にあるもの—

“女性の問題”とは、奴隷制反対協会内部の男女平等を要求する女性会員による問題提起である。協会の男性指導者ガリソン(1805-1879)が理解を示したことも、この問題提起の土壌を用意したといわれており、その効果あって1828年に初の女性委員が選出された。しかし、そのことによって八人の男性会員が抗議して協会を脱退する(Lb82)。

ガリソン宛の書簡でチャイルドは、この問題についてこのように述べている。“個人的には、奴隷制反対集会におけるいわゆる女性の問題について、議論をしたくはありません。もし人が協会や会議から引退するように勧めたり、私自身の判断のもとに行動することを非難したりしたら、あなたは私の魂の自由に触れることはできないと言おうと思っています” (Lb 9/2/1839)。この言説は、次に挙げる言説を合わせてみるとその意図が理解できる。女性のみで会員による集会に対するチャイルドの言説である。“それはまるで片方の刃しかないはさみのようなものです” (Lb 3/5/1839)。つまり、女性が排除されたからといって、それに対抗するために女性だけで活動をしても、それは不完全なものにしかならないという感覚である。ここには、チャイルドにとって奴隷制反対運動が、女性史、家族史研究における評価とは異なり、“女性の領域”内での活動ではなかったことの確証があるといえる。女性協会への書簡で奴隷制の原因を問うことの必要性が述べられた(1で引用)が兄宛の手紙(Lb 12/19/1835)に書かれたチャイルドのそれに関する考察には、“女性”であることへのこだわりはな

い。

協会内における“女性の問題”は、当然女性の選挙権という問題に拡大する。積極的に認めようとする意見をもつ男性運動家との会話を、チャイルドは友人への手紙に書いている。“私は彼にこう言ったのです。女性が男性と同様、権利をもっていると私も思います。でも、政治がそのように全く悪質な基盤に基づいている以上、私はその権利を手に入れようとは思いません。そうしたら彼が言うには、それなら貴女は奴隷に適していますよ、ということです” (Lb 3/7/1839)。

以上の言説群は、本節1でみたような“女性性”に対するアンビヴァレンスや葛藤を含む言説群とは位相を異にしている。その根底にある信念あるいは確信ともいうべきものは、次章でみるように、チャイルドの人間形成と深く関わるのみならず、「母の本」において女性の人間形成のあり方が問題とされたことの核心的な要因となるのである。

### Ⅲ. 女性の人間形成の問題化と「母の本」

#### A. チャイルドの言説における“女性性”と“個”の意識—調和と相剋—

Ⅱで確認された、“女性性”へのアンビヴァレンスとは異なる確信のようなものとは何か。その一端は、既に引用したガリソン宛の書簡言説(Ⅱ章C節2項)にある。即ち自らの“魂の自由”の確信である。チャイルドにとって、期待される“女性像”と異なっているといった非難は問題ではなかったことは既に見た通りである。彼女にとっては、“女性”としてよりも“自由”な“個人”として生きることのほうが重要であった。1992年に書かれた彼女の伝記、「自由への戦士」のタイトルにもあるように、彼女にとって“自由”は非常に重要なタームなのである。

宗教的セクトに対しても、その“自由”をもって反発している。“私が本当に心から信仰しているセクトはあることはあります。…でも、私はもう一度生まれてきたとしたら外面的にはどの会(society)にも入らないでしょう。そこには、精神的支配や個人の自由への侵害(傍点:引用者)があるからです” (Lb 3/20/1838)

このような“個”の意識は彼女が十九才のときの書簡にも既に見ることができる。女子学校での教職につき意気盛んな時代の兄への手紙である。“お兄さん、あなたが私の同じくらい幸せであれば、と思います。私が高望みしているではありませんよ。私の望みはただ勤勉で思慮深くして独立したいということなのです” (Lb

3/12/1820)。デイムスクール、ローカルグラマースクールまでは兄に続いた彼女の、学校における男女の区別、また大学進学の前準備教育に進んだ兄との違いという経験は、彼女の“独立”心に何らかの影響を与えたかもしれない。更に、結婚してから、何を始めても不首尾に終る夫との心理的確執も、自らの仕事に打込む要因になったかもしれない。チャイルド夫妻は経済的にも苦しかったようで、夫に代わって“稼がなければ” (Lb 11/27/1836) という気持ちがあったことは確かである。しかし、このような個人史に要因があったとしても、それを確信として心にもつことができたのは、次のような信念からであろう。“私は、本当の、そして実質的な自由 freedomの信念をもっています。(中略) 私たち(アメリカ人)は自由の守護者としての誇りをもっているのです” (Lb 7/10/1862)。

ここで、チャイルドの言説における“女性性”と“自由”な“個人”の関係を考察してみよう。Ⅱ章においてみたように、チャイルド自身の言説から一貫した女性観を読み取ることはできない。彼女の言説が“女性性”をめぐる自己矛盾に陥ることは明らかである。その矛盾は、“自由”な“個人”あるいは“独立”といった理念によって隠蔽される。レクチャーをするか否か、女性だけの協会に入るか否か、等といった選択を迫られる局面において、この理念はその選択を無化することができる。“個”の意識は“女性性”をめぐるゆれや葛藤のなかで、それと調和をはかることも、相剋する概念ともなるからである。即ち、それは“女性性”の不安定さを解消することができたのである。

#### B. 娘の教育＝女性の人間形成の問題化—「母の本」の言説をめぐる—

アンテベラム期の歴史に残っている女性で、チャイルドとは異なる活動や経験をした女性は数多くいる。また、そのような歴史に登場しない女性たちは、それとはまた異なった経験をもったかもしれない。しかしながら、チャイルドの経験や思いは当時の中流女性の経験に通じるものであったということができる。書簡におけるチャイルドの言説をそのように読むことによって、「母の本」で書かれた母と娘の関係は、女性の人間形成の過程、つまりプロセス上の問題として解釈することができる。この分析は、以下のような考察によって行っている。

「母の本」における“娘”の教育に際する〈母〉の仕事と心構えというテーマ、およびそこで殊更に強調される〈母〉の“自己”への視線は、チャイルドの書簡における“女性性”をめぐるゆれ、アンビヴァレンスにみら

れるような、女性の生き方、人間形成における危機、あるいは断絶を示している。「母の本」の言説における女性の人間形成の問題を一般化することができるのは、それが多くの読者を持ったこと、その書物の内容について著者が自らの個性を否定し一般的な事柄であることを強調したことによる。

それに対し、チャイルドの書簡言説は、パーソナルなものではある。にもかかわらず、彼女の“自由”な“個”への信念が、「母の本」における〈母〉の“自己”への視線を通じるものを含んでいるということができるのは、「母の本」における規範的な言説を、書簡言説という対話的な言説を介して試みるという解釈の試みによってである。即ちこうである。

主として、アンテベラム期における〈母〉は、“息子”の教育との関連で語られてきた。しかし「母の本」に関していえば、その内容やテーマ、それへの読者の関心から、そこにおける〈母〉の理想像は“娘”との関係が深いといえる。つまり“十二才から十六才の娘”の特別な危険性についての言説は、〈母〉と、その〈母〉に教育される“娘”，という主客関係としてではなく、〈母〉となるはずの“娘”の、即ち女性の人間形成のあり方の問題として読むことができるのである。そして、チャイルドの書簡においてみられる“自由”，“個”といった言説は、当時の女性が“女性性”へのとらわれはありながらも、それには包摂されない“自己”という感覚をもつ可能性があったことを表わしている。チャイルドは母とならなかったが、重要なのは彼女の個人史ではない<sup>29)</sup>。彼女の言説が含む可能性が重要であり、このことは次のような結論を導くのである。即ち、「母の本」において〈母〉は、女性が“自己”を確認する概念として言説化されたのである。

## おわりに

本稿は、「母の本」とその著者チャイルドの書簡言説という限定された史料に基づいた、アンテベラム期の家庭教育書・育児書分析のケース・スタディである。本稿における分析の結果を要約しよう。

アンテベラム期における家庭教育書・育児書の氾濫およびそこにおける〈母〉の礼讃は、諸々の要因によって説明されてきた。しかし、それら書物のひとつである「母の本」のテーマが、“娘”の教育であり、その仕事に際しての〈母〉にとりわけて“自己”への視線を要求する言説を含むことは、その書物の言説において、女性の人間形成が問題とされていることを示している。この

ことは、チャイルドの書簡言説における、“女性性”へのアンビヴァレンスを無化するような“自由”という理念への信念にみられる、“個人”への固執によって説明できるであろう。そして「母の本」においてみる限り、〈母〉とは“女らしさ”の理想化の一端としてというよりも、女性の人間形成という問題の鍵概念として、即ち〈母〉になることの“自己”認識として言説化されたのである。

以上が結論であるが、本稿において導き出されたことは、更に歴史的(系譜的)、共時関係的分析を要する問題につながる。チャイルドの言説において、“女性性”をめぐるゆれが“自由”な“個”の理念によって解消されることは確認した通りである。これは“女性性”という概念が、“女性の領域”という言葉にあるような明確な領域性を持たなかったことを示している。更に考えなければならないのは、その不安定な領域性が、“自由”な“個”という主として男性の領域に属するものとして用いられる概念(Ⅰ章A節第3項を参照)によって、隠蔽されたことの意味である。ここではその問題を解明することはできない。しかし、例えば、「母の本」やチャイルドの書簡言説を以下のような言説と比較してみよう。娘が“自然が女性に与え給うまま”に形成されることを望んだ「父から娘への遺産」(1765)の言説。また独立革命直後の、(父・母・息子・娘が友達であるかのような)平等主義的家族の勧めである諸雑誌の言説<sup>30)</sup>。それらは、本稿で考察した言説群とは明確に異なることは明らかであろう。また、同じアンテベラム期においても、書き手の性や立場によって、〈母〉の語られ方は異なっているのである。

これらの比較から考察されることは少なくとも二つある。まず“娘”を育てる方法や考え方にみられる女性の人間形成過程のあり方の歴史的変化であり、いま一つは、そのあり方の男性との差異と相互関係性である<sup>31)</sup>。「母の本」では、幼少期は男女区別なく同様の対し方が勧められている。この事実が意味するものの考察は、次稿の課題としたい。

## 註

- 1) Ryan, M. P., *The Empire of the Mother: American Writings about Domesticity 1830-1860*, Harrington Park Press, NY, 1985
- 2) 言説上の母を〈母〉とする
- 3) Welter, B., "The Cult of True Womanhood, 1820-1860", *American Quarterly*, 18, 1966
- 4) 拙稿「アメリカ母子関係史の課題—アンテベラム期に関する



- 諸論を手がかりにー』『研究室紀要』第20号, 1994年, 東京大学教育学部教育哲学・教育史研究室
- 5) 議会図書館の検索によるチャイルドの伝記のリストは次の通りである。  
Higginson, T. W., *Contemporaries*, Boston & New York, Houghton, Mifflin and Company, 1899, Beach, S. C., *Daughters of the Puritans: A Group of Brief Biographies*, Books for Libraries Press, Inc., Freeport & NY, 1905 (rep. 1967), Clifford, D. P., *Crusader for Freedom: A Life of Lydia Maria Child*, Beacon Press, Boston, 1992, Mills, Bruce, *Cultural reformations: Lydia Maria Child and the Literature for reform*, Georgia UP, 1994, Karcher, L., *The First Woman in the Republic: a cultural biography of Lydia Maria Child*, Duke UP, 1994
  - 6) *Women's America: Refocusing the Past*, ed., Kerber, L. & Mathews, J. de H.
  - 7) Sunley, R., 'Early Nineteenth-Century American Literature on Child Rearing', *Childhood in Contemporary Cultures*, ed., Mead, M. & Wolfenstein, M., Chicago UP., 1955, Wishy, B., *The CHILD and The Republic: The Dawn of Modern American Child Nurture*, Pennsylvania, UP., 1968
  - 8) Ryan, M. P. op. cit., Ryan, M. P., *Cradle of the Middle Class: Family in Oneida County, New York, 1790-1865*, 1981, Blumin, S., *The emergence of the middle class: Social Experience in the American city, 1760-1900*, Cambridge UP, 1989
  - 9) Kuhn, op. cit., Wishy, op. cit.
  - 10) Kuhn, *ibid.*, Wishy, *ibid.*, チャイルドも骨相学, ハイドロパシー, マグネティズムなどに関心を寄せていた。(Lb149, および11/23/1842)
  - 11) Wishy, *ibid.*, Keastle, C. F., & Vinovskis, "From Apron Strings to ABCs: Parents, Children, and Schooling in Nineteenth-Century Massachusetts", *Turning Points: Historical and Sociological Essays on the Family*, ed., Demos, J., & Boocock, S. S., Chicago UP., 1978
  - 12) Ryan, op. cit., 1985, チャイルドの書簡においても, 彼女が初めて小説を出版した1820年代初頭には, アメリカで印刷・出版された書物はまだ少なかったと指摘している。(Lb 10?/?/1946?)
  - 13) Higginson, T. W., op. cit., p.119
  - 14) Ryan, op. cit., 1985, pp.60~61, 史料としている小説は, チャイルドと同世代のセジウィック (1789~1867) の「クレアランス」(1830)
  - 15) Rosenberg, Carroll Smith-, "The Female World of Love and Ritual: Relations Between Women in Nineteenth-Century America," *Women's America*, op. cit., pp.164~165 (初出は *Signs*, No.1, Autumn, 1975)
  - 16) Mechling, J. E., "Advice to Historians on Advice to Mothers," *Journal of Social History*, Vol.9, No.1, fall, 1975
  - 17) Rosenberg, op. cit., p.165
  - 18) Degler, op. cit. p.106 (1863年の書簡)
  - 19) Dye N. S., & Smith, D. B., "Mother Love and Infant Death, 1750-1920", *The Journal of American History* Vol.73 No.2, Sep. 1986, Hoffert, S. D., *Private Matters: American Attitudes Toward Childbearing and Infant Nurture in Urban North, 1800-1860*, Illinois UP, 1989
  - 20) 奴隷性廃止論者, 扇動家として有名。1811-84
  - 21) 拙稿, 前掲論文
  - 22) Kelly, M., *Private Woman, Public Stage: Literary Domesticity in Nineteenth-Century America*, Oxford UP, 1984, p.320
  - 23) Deglar, op. cit., p.302, Douglas, A., *The Feminization of American Culture*, Anchor Books doubleday, 1977, P.69
  - 24) Blumin, p.186
  - 25) Douglas, op. cit., p.86
  - 26) Ryan, op. cit., 1985, p.22
  - 27) Douglas, op. cit., p.56
  - 28) Ryan, op. cit., 1985, p.119, 8/23/1840の書簡
  - 29) このことは, 「母の本」についてもいえる。この本が書かれたのはチャイルドが二九才のときだったが, その時点で彼女の「女性性」に対するアンビヴレンスがどのようなものかを問うても, それは推測の域を出ない。また, チャイルドのパーソナルな経験を, この本の内容が書かれた要因として分析する方法が適切でないことは, 本稿 I 章 B 節および II 章 A 節において確認されている。
  - 30) Norton, M. B., *Liberty's Daughter: The Revolutionary Experience of American Woman, 1750-1800*, 1980, p.112, pp.235~236
  - 31) 「今日の歴史学」に対して女性史が突きつけたものは「言説の構築を社会的なものに結びつけ, また社会の構築を言説に結びつけるという課題」であるといわれている(ロジェ・シャルチュエ「今日の歴史学-疑問・挑戦・提案」『思想』No.843, 1994年9月)。教育史においては, 男と女という項の関係のみならず, それぞれの人間形成のあり方とその相互関係を表わす「言説の構築」を, 歴史的に問うことが求められるであろう。

## 引用文献

〔一次史料〕

Child, L. M., *The Morher's Book*, Boston, Carter, Hendee and Babcock, 1831

(本文中における表記は, M頁数)

*Letters of Lydia Maria Child with A Biographical Introduction by John G. Whittier and An Appendix by Wendell Phillips*, Boston, Houghton, Mifflin and Company, 1883

(本文中における表記は, La頁数)

*Lydia Maria Child Selected Letters, 1817-1880*, ed. by Melzer, M. & Holland P. G., Mass. Up. 1982,

(本文中における表記は, 解説はLb頁数, 書簡はLb年月日)

(指導教官 寺崎弘昭助教授)